甲状腺機能正常にありながら高TSH血症が持続する症例の経過と検査成績について

村田光範，神原美鈴

（東京女子医大第二病院小児科）

研究目的

新生児クレチン症マス・スクリーニングにより高TSH血症を指摘され，その後継続して30−50μU／ml 程度の高TSH血症があり，TRH負荷試験には過剰反応を示すが，血中の甲状腺ホルモンレベルは常に正常であり，甲状腺ホルモン投与により高TSH血症は正常化するといった状態を持続している症例を経験している。興味ある症例と考え，その後の経過を報告するとともに若干の考察を加えたい。

症例

この症例は昭和55年10月4日生まれの男児であり，この研究班会議において毎年報告してきたものである。3歳までの経過は昭和58年度研究報告書を参照して欲しい。3歳以後は甲状腺ホルモンを投与することなく，経過を観察しているが，身長と体重の増加を成長曲線で検討してみると＋1SDの線に沿って正常のパターンを示しており，知能発達も正常である。最近行なった甲状腺機能検査成績，および下垂体機能検査成績を表1と表2に示した。

表1　甲状腺検査成績（11／21／85）

TSH	30 μU／ml
T4	14.9 μg／dl
T3	198 ng／dl
FT4	1.21 ng／dl
TBG	29 ng／ml

表2　下垂体ホルモン分泌能試験（9／30／85）

	TSH	GH	FSH	LH
前	33	0.6	4.2	10
30°	140	2.6	11.0	23
60°	96	25.0	15.0	23
90°	90	12.0	17.0	21
120°	76	7.4	16.0	19
180°	44	2.1	12.0	15

TSH μU／ml，GH μU／ml
FSH mIU／ml，LH mIU／ml

甲状腺腫はまったく触れず，4歳6ケ月のときに行なった甲状腺シンチグラムで甲状腺は正常の位置にあり，正常の形態であった。放射性ヨード摂取率は24時間値で15.5％であった。両親と同胞（兄一人）の末梢甲状腺ホルモン動態は正常であった。

考　　案

この症例は，いままでマススクリーニングで発見された代償性甲状腺機能低下症として報告してきたが，今回行なった各種の検査成績からすると，従来からいわれてきた意味での代償性甲状腺機能低下症とするべきではないであろう。ＴＲＨ負荷試験によって過剰反応を示すこと，甲状腺ホルモン投与により高ＴＳＨ血症が正常化することから，視床下部・下垂体・甲状腺系の関連は正常に保たれていると考えられる。甲状腺スキャンにより甲状腺の位置と形態には異常がなかった。甲状腺腫のないこと，放射性ヨードの甲状腺摂取率も正常であることから，甲状腺内部における甲状腺ホルモン合成過程も正常であることが推測される。これらのことから，この症例ではＴＳＨが甲状腺組織を刺激する機構に軽度の異常があると考えられる。甲状腺におけるレセプター，あるいはポストレセプターの異常か，または何らかのＴＳＨ結合阻害物質の存在が考えられるが，先天性であることを加味すれば，レセプターに関係した異常の方が考えやすい。甲状腺疾患ではないが，これに似た状態として単純性肥満における高インスリン血症を想定して，この疾患の病因を検討することは無理というものであろうか。

文　　献

村田光範　他：マススクリーニングで発見された代償性甲状腺機能低下症の問題点。厚生省心身障害研究　マススクリーニングに関する研究　昭和58年度研究報告書（主任研究者：和田義郎），115－116頁

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

新生児クレチン症マス・スクリーニングにより高 TSH 血症を指摘され,その後継続して30-50μU/ml程度の高TSH血症があり,TRH負荷試験には過剰反応を示すが,血中の甲状腺ホルモンレベルは常に正常であり,甲状腺ホルモン投与により高 TSH 血症は正常化するといった状態を持続している症例を経験している。興味ある症例と考え,その後の経過を報告するとともに若干の考察を加えたい。